

令和 5 年 6 月 29 日現在

機関番号：37112

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K12876

研究課題名（和文）未婚者の親による結婚活動と親子関係に関する研究

研究課題名（英文）Matchmaking Activities of Parents of Unmarried Children and Intergenerational Relationships in Japan

研究代表者

田中 久美子（TANAKA, Kumiko）

福岡工業大学・社会環境学部・准教授

研究者番号：40508503

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：未婚の子どもの結婚相手を探す親たちや、親たちから子どもの結婚相手の紹介を依頼された仲人への聞き取り調査を実施し、現状を把握するとともに、配偶者選択における親の関与の変化を整理した。親の子どもの配偶者選択への関与からみえてきたことは、結婚後の生活のために親が経済的条件がよい相手を探していることだけでなく、親が探してくることも、誰かが声をかけてくれるのを待っている未婚者たちがいることである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

親が子どもに代わって結婚活動を行っている現象を、見合い結婚や、パラサイト・シングル論における親子関係から検討した。これまでの研究では、結婚活動をしているにも関わらず、結婚できない人に焦点が当てられてきた。しかし、結婚したくないわけではないが、自ら結婚活動を行うことが難しい未婚者が存在する。親の介入が、こうした未婚者の結婚活動そのものを後押ししているケースがあることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Several parents who have unmarried children are looking for their children's prospective mates. This research explored the situation by examining the relationship between the parents and children, focusing on the transition from love marriages to arranged marriages, through interviews.

It was found that parents meddled in their children's mate selection not only to secure financial stability after marriage, but also because their single children took a more passive role, expecting their parents to look for their future spouses and waiting to be approached by someone.

研究分野：民俗学、社会学

キーワード：親の婚活 成人した子と親 中期親子関係 配偶者選択 見合い結婚 恋愛技術

1. 研究開始当初の背景

日本において少子化が問題となっているが、その主因は結婚する人の減少であることが広く知られるようになってきた(山田 2010)。結婚に関する研究にいち早く取り組んできた山田昌弘らは、未婚化が進んでいる理由は、一生結婚するつもりがないと考えている人が多いからではなく、理想的な相手にめぐり合わないからという理由が多くを占めていることを明らかにし、未婚者自身が結婚相手を探すために積極的に結婚活動(婚活)を行うべきであることを主張してきた(山田・白河 2013)。

ところが、未婚者本人というよりも、親が結婚活動をして子どもの配偶者候補を選び、子どももそれに期待している現象がみられる。

日本では、現在でも結婚に際して親の関与があることは経験的に知られているが、研究はあまり行われてこなかった。配偶者決定において、親の影響があることを指摘したものに、筒井淳也の研究がある(筒井 2016)。しかし、筒井の研究は計量的な研究に基づくものであり、具体的に親が配偶者決定にどのように介入したのかということはわからないため、より具体的に親の関与がどのようなものであったのかを、インタビュー調査から明らかにしていく必要がある。

そして次に、山田昌弘による親の代理見合いや、子どもの結婚相談所利用での干渉といった婚活ビジネスを事例とした、親の結婚活動や介入についての研究がある(小澤・山田 2010、山田 2013)。山田は、親が活動・介入することによって、結婚条件への希望が高くなって結婚難を生み出したり、結婚させること自体を目的とするため、男女交際の不活発化を生み出したりするなどの問題点を明らかにしている。この研究は、婚活ビジネスを事例としていること、親ではなく仲人のインタビューに特化したものであることから、広く親が行う結婚活動と親の語りへ目を向けること、配偶者探しを親に任せる子どもの状況を明らかにすることが重要である。

2. 研究の目的

本研究がまず行うべきことは、子どもの結婚相手を探している親の行動や活動の実態を把握することである。配偶者選択の方法、行動の仕方、それに伴う人々の価値観や意識等は、祖父母の世代、父母の世代、子どもの世代で異なることから、それぞれの世代において、どのような配偶者選択が行われ、そこに親がどのように関わってきたのかを事例から整理する。そして、親が子どもにどのような結婚を望むのかは、親が結婚した時の条件、結婚後の夫婦関係、生き方・暮らし向き等が関係していると考えられる。そこで、親の生活史の聞き取りもあわせて行う。

一方、配偶者選択を親に依存する子どもの態度は、子どもの経済状況・社会状況等とも関係があると考えられるため、それらを把握する。その上で、これらの親子関係をふまえた結婚支援のあり方を考察する。

3. 研究の方法

親による子どもの配偶者選択への介入に焦点をあてる本研究では、実際に子どもの配偶者を探している親、探した経験がある親を対象として、子どもの結婚に対する考え方、実際の探し方、その結果等についてインタビュー調査を行った。その中で、「親の代理見合い」の調査も行い、状況や問題点等を聞き取った。さらに、未婚の子どものために配偶者探しを行う親は、自力で相手を探すというよりは、知人や結婚相談所、仲人に相談したり、紹介を依頼したりしていることがみえてきたことから、仲人へのインタビュー調査も進めた。また、配偶者選択方式の変化や当時の状況については、聞き取り調査だけではなく、公共図書館で関連する資料の収集を行った。

しかし、新型コロナウイルスの感染拡大により、本研究で重視していたインタビュー調査を長期間にわたって中断せざるを得なくなり、研究の流れが変わってしまった。感染収束のタイミングをはかるのが難しく、現地調査の再開が最終年度の冬近くになってからになったため、考えていたインタビュー調査の中には十分に実施できなかったものもあった。

4. 研究成果

(1)恋愛から見合いへ

まず、親や親族が子どもの結婚相手を決める見合い結婚が行われるようになる前に、人々が結婚相手とどのように出会っていたのかについて説明する。

北部九州のある農村地域には、どこの集落にも「青年団」と呼ばれる男性の仲間があり、15 になると、集落に残って農業を継ぐ跡取りの男性は必ず青年団に入っていた。ある集落には昭和 30 年代まで「青年宿」があり、青年団の男性たちは毎日農作業等の仕事が終わって夕飯を済ませて風呂に入った後、そこに行って寝泊まりをしていた。一般的に青年団では、先輩たちから礼儀や躰を教え込まれ、祭り等の担い手として重要な役割を果たすことで、地域社会で暮らしていくために必要なことを身につけ、一人前の大人になっていった。

この集落では当時、普段、男女が同席することは許されず、年に 1 回、旧暦 8 月 26 日の二十六夜待だけが、一緒に遊べる機会だった。ところが青年団は性教育の場でもあり、「よばい」が行われていた。見合い結婚も行われていたが、実際によばいがきっかけで結婚したと思われる夫

婦もいたという。

よばいには礼儀があり、相思相愛になっている男女がいる場合には、他の男性はそこによばいに行ってはいけないことになっていた。このようによばいは、独身者たちが自分で配偶者を探すために行われていた。しかし当時、「遊び」のよばいも行われていた。この遊びのよばいは、主に他集落の男性たちによって行われていたが、女性をだましてよばいを行う男性も現れるなど風紀が乱れたという。その後、生活改善運動で家の改良が進んだり、子どもの数が減って青年宿に泊まる必要がなくなったりしたこともあるが、親たちもこうした若者たちの行動をよく思わなくなり、青年宿も自然になくなった。

一方、この時期は、すでに集落によってはよばいが行われなくなっていたり、よばいはあっても、他集落の男性による遊びのよばいだけが行われていたりしたともいう。その場合は、配偶者選択は見合いによって行われていたわけだが、見合いが多く行われるようになると、自分から相手を好きになる恋愛は行われるべきではないとされた。つまり、恋愛は軽蔑されるべきものとなった。

(2) 配偶者選択技術の喪失

次に、見合い結婚が行われていったことによって、配偶者選択における未婚者たちの態度がどう変わってしまったのかを検討した。若者仲間による配偶者選択によって、似合いの夫婦が生まれたと評価した民俗学者の柳田国男の婚姻論に注目した(柳田 1990[1931])。具体的には著作の中から『明治大正史 世相篇』と『婚姻の話』を取り上げた。さらに、戦後、民法改正のために衆議院司法委員会が審議が行われたが、昭和22(1947)年8月に開かれた公聴会において、柳田は学識経験者として「婚姻の要件、夫婦財産制及び離婚手続」について意見を述べたため(衆議院事務局 1947)これを資料とした。先にみたように、若者組(青年団)において配偶者選択が行われなくなると、見合い結婚という、子どもの結婚相手を探すことから決定まで、親主導のもとで多くの結婚が行われるようになった。そのため、柳田は民法改正によって、未婚者たちが自由に結婚相手を選択できるようになったとしても、自分たちで相手を選択することが難しいと考えていたこと、こうした未婚者の状況を変えるべく、出会う機会や相手を知ることができるような機関を設けることを提案した。

(3) 見合いの衰退

青年団という出会いの場がなくなると、特に農家の男性たちは結婚相手の候補に出会うことが難しくなった。結婚相手の候補を探してきて紹介し、縁談をまとめていく人を「仲人」というが、柳田は仲人に関心を示した(柳田 1990[1948])。それらをまとめると、機転が利く、時間を割くことができる、金儲けのためにしない、根気強いといった性格が仲人に期待されたことがわかる。地域社会の中での男女の出会いの場がなくなったことで、先に取り上げたよばいが行われていた集落の周辺で暮らす未婚者の親たちは、農家を回って営農指導をしていた顔が広い農協の職員に、息子の結婚相手の紹介を頼むようになった。昭和5(1930)年生まれの男性は、40歳位から農家に頼まれて、相手を紹介するようになったという。どこの家に独身の女性がいると聞けば、あちこちで情報を集めて確認し、紹介した後は何度も頼みに行き、縁談をまとめようとした。これは柳田が注目した仲人の性格に添うものである。結婚相手を紹介できるような人が減り、このように結婚相手に困る人も出てきたため、行政で住民の結婚の世話をしようという話が出たこともあったが、立ち消えになったという。

さらにこの頃になると、見合いといっても結婚相手の候補者を紹介された後は、親や親族のみで結婚相手を決定するのではなく、本人の気持ちも尊重されるようになってきた。しかし、本人の希望が反映されるということは、当然、親が一方的に決めていた時と比べると結婚が決まりにくくなるということである。

(4) 親による婚活

婚活ブームの初期は、当事者である未婚の男女ではなく、その親たちから始まっていることが指摘されている(開内 2010)。これは積極的に活動しなければ結婚相手に出会えなくなった子どもたちに代わって、活動する親たちを捉えたものである。ただし、この親が積極的に子どもの配偶者候補を探す活動は、以前から行われてきた見合いの延長であると考えられることもできるし、仲人の減少によって親自身が自ら子どもの配偶者を探すために動かざるを得なくなったと考えることもできる。ところが現在では、かつてのように誰もが結婚するわけではなくなったということは親もわかっている。それでも母親たちによる近所の人との立ち話や、知人との電話等でのおしゃべりでは、相手がたずねなくても自ら話題にするほど、自分の子どもが未婚であることは、気になる事柄である。

親たちは、次のように子どもの結婚相手を探していた。まず、とりあえず、知人・友人・親戚といった身近な人にたずねてみる。これらの人々は特に普段から結婚相手の紹介をしているわけではない。仲人をしていない人に結婚相手の候補の紹介を依頼する。この場合、子どもが仲人に直接頼むのではなく親が頼んでいる。結婚相談所や、個人的に仲人を行っていて地域でよく知られた人の場合もあるが、頼む仲人は、親戚、親の知人、親の学生時代の恩師だったり、身近な関係にいたり、よく知っている人であった。親同士が知り合いで、希望に合う未婚の子どもがいる場合、親に直接打診する。「親の会」(仮称)と呼ばれる、親同士で子どもたちの

情報交換を行う、いわゆる代理見合いに参加する。インタビューを行った会については、参加している親同士の印象は悪くないとのことであった。しかし、参加メンバーがある程度固定化してしまっていることもあるが、そこで子どもの結婚相手を決めることは難しい。自分の子どもを結婚させるために、自治体の結婚相談員になり、他の未婚者の世話をしながら、自分の子どもの結婚相手を探す人がいる。婚活のマニュアル本の調査を行ったところ、結婚相談業を開業する人の中にも、親の目で選んだ相手と自分の子どもを結婚させることを目的として、結婚相談業を開業する人がいるとの報告があった(中西 2012)。

実際に子どもの結婚相手を探す場面では、父親より母親が動いていることが多かった。

子どもの結婚相手の条件に関しては、先行研究では、娘の方が結婚の決定に際して親の影響があると言われてきた(筒井 2016)。しかし、息子の収入が高くない場合、親は息子の結婚相手探しに介入し、相手の女性の職業(収入)をみるケースがあった。

結婚相談業を個人で開業している人の中には、子どもが結婚するため、または結婚後の生活も考えると親の関わり方が重要であると考え、親の相談会を開いて親にその考え方を伝えようとしてきた人もいた。

(5)子どもの態度

未婚者の態度として、親が結婚相手を探してきてくれることを期待している人もいたが、親の紹介を拒否したり、自分で探すことを明言したりする人もいる。その中で、結婚したくないわけではない未婚者で、結婚活動を行うことに本人は乗り気ではないが、親のサポートを受けながら結婚活動を進めていくケースがある。親は、子どもが自分で結婚相手を探せる性格であるかどうかをみて、探せないと判断した場合、結婚相手探しに介入していた。兄弟でも親が介入するかどうかは子どもによって異なった。

調査において印象的だったのは、こうした受け身である人たちの中には、特に男性だったが、選んでもらえれば誰でも良いと考えている人たちがいることだった。結婚相談所に登録している人たちの中にもこのように考えている人たちが意外という。しかし、このような人たちはなかなか結婚が決まらないという問題を抱えていた。

以上より、結婚したくないわけではなく、誰かが紹介の話を持ってきてくれるのを待っている、相手の条件にこだわりがないといった人たちは、見合いが広く行われていた時に引き続き、一定程度存在している。このような待っている人たちにどう親だけではなく、仲人のような他者が関わられるのか、出会いの機会が提供できるのかを考えていく必要がある。

新型コロナウイルス感染拡大により、現地調査の再開が研究期間終了間際となり、その際に収集できた資料もある。これらは引き続き分析して、公表していく予定である。

引用文献

- 小澤千穂子・山田昌弘 2010『結婚仲人の語りから見た『婚活』』『「婚活」現象の社会学』東洋経済新報社
- 衆議院事務局 1947『第一回国会衆議院司法委員会公聴会会議録第一号(昭和22年8月20日)』<https://kokkai.ndl.go.jp/pdf/100104391X00119470820> (検索日:2023年6月27日)
- 筒井淳也 2016『結婚と家族のこれから 共働き社会の限界』光文社
- 中西清美 2012『親のための 子どもの婚活応援ガイド』アルマツト
- 開内文乃 2010『婚活ブームの二つの波 ロマンティック・ラブの終焉』『「婚活」現象の社会学』東洋経済新報社
- 柳田國男 1990[1931]『明治大正史世相篇』『柳田國男全集』26 筑摩書房
- 柳田國男 1990[1948]『婚姻の話』『柳田國男全集』12 筑摩書房
- 山田昌弘 2010『「婚活」現象の裏側』『「婚活」現象の社会学』東洋経済新報社
- 山田昌弘 2013『婚活の現実と格差 あきらめる男性、疲れる女性』『「婚活」症候群』ディスカヴァー・トゥエンティワン
- 山田昌弘・白河桃子 2013『「婚活」症候群』ディスカヴァー・トゥエンティワン

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 田中 久美子
2. 発表標題 恋をせずに結婚する深い悲しみ 配偶者選択における恋愛技術の喪失と親子ー
3. 学会等名 環境科学研究所第16回（2021年度）研究発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中 久美子
2. 発表標題 見合い相手を紹介する技量とジェンダー 仲人の役割の検討を通して
3. 学会等名 第71回関西社会学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Tanaka Kumiko
2. 発表標題 The deep sorrow of not being able to marry the one you love - Focusing on the “Yanagita Kunio and Japanese Folklore” and its uniqueness
3. 学会等名 International Conference to Commemorate 100 Years of Japanese Studies at the University of Warsaw, “Unique or Universal? Japan and its Contribution to World Civilization”（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中 久美子
2. 発表標題 地域社会における信仰の担い手とジェンダー
3. 学会等名 日本民俗学会第70回年会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田中 久美子
2. 発表標題 見合いにおける親の行動と影響
3. 学会等名 平成30年度産学官交流会・研究成果発表会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田中 久美子
2. 発表標題 地域社会における文化の継承と家族
3. 学会等名 The 9th International Symposium on Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中 久美子
2. 発表標題 配偶者選択における親と子
3. 学会等名 環境科学研究所環境研究発表2018
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 森弘子・須永敬・吉田扶希子・中村琢・田中久美子他	4. 発行年 2023年
2. 出版社 宗像市	5. 総ページ数 -
3. 書名 『新修宗像市史』祈りとまつり（「后曲のヤジまわしと盆行事」田中久美子）	

1. 著者名 藤井洋次、鄭雨宗、李文忠、尹諒重、松藤賢二郎、片岡雅世、橘雄介、乾隆帝、陳艷艷、上杉昌也、渡邊智明、田中久美子、木下健、白坂正太、池田賢治、上寺康司、徳永光展、宗正佳啓	4. 発行年 2021年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 434
3. 書名 『社会環境学へのアプローチとその展望 福岡工業大学社会環境学部20周年記念論集』（「恋をせずに結婚する深い悲しみ 配偶者選択における恋愛技術の喪失と親子」田中久美子）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------